

「公開で議論を」医療事故遺族が群大に要望

(朝日新聞 2018年6月23日)

手術後に患者が死亡する事故があった群馬大学医学部付属病院（前橋市）で22日、遺族らとともに医療安全を話し合う「患者参加型医療推進委員会」の初会合があった。冒頭以外は非公開で行われたため、委員の遺族らは委員会の一般公開などを要望した。

委員は遺族2人のほか、群大病院の職員ら。

冒頭のみ報道陣に公開され、田村遵一病院長は「（遺族の話を）真摯（しんし）に受け止め、改善に生かしていきたい」とあいさつした。

開催後に会見した群大病院によると、群大病院での新たな取り組みやほかの病院の事例について説明。職員負担などについても話し合った。今後は年に複数回、定期的に開くとした。

一方、遺族も別に会見し、要望書を提出したことを明らかにした。委員会の公開のほか、議事録全文をホームページで公開▽委員会の権限強化▽少なくとも年4回の開催▽医療事故に遭った患者や遺族2人以上を委員とする——などを求めたという。

委員として参加し、手術ミスで父親を亡くした木村豊さんは「安全に関わる議論を、密室で決めることなく責任持って進めていく必要がある」。また、看護師だった妹を亡くした小野里和孝さんは「閉鎖的な体質を脱却して欲しい。『温かい看護をしたい』と話していた妹の思いを、この委員会で少しでも実現したい」と話した。

〈長女を出産事故で亡くし、群大病院の第三者委員会委員も務めた

元中央社会保険医療協議会委員の勝村久司さんの話〉

遺族が委員として病院の改革に携わるのは画期的なことだ。16年ほど前、長女を亡くした病院の監察委員協議会に遺族の私が参加したが、それ以降、遺族の参加はあまり例がない。

遺族は病院に対し、批判的な感情や不信感を持っているわけではなく、本気で再発防止を願っている。遺族が、家族の死に意味を持たせるためにできることは、再発防止しかない。

そうした遺族の力や要望を、医療改革に取り入れていくべきだ。

遺族参加が形だけになっては意味がない。年に数回だけではなく、できるだけ多く委員会を開催していく必要がある。成果が出るまで議論を重ね、議事録はホームページなどで公開し、遺族の発言が病院の改革に生かされるようにしなければならない。